

- 問1 弥生時代に本格的に始まった稲作において、収穫の際に用いられた石包丁の使用方法について説明したものととして、最も適切なものはどれですか。（2017年 千葉県公立入試 類似）

1. 稲の穂の部分を摘み取るために用いられた

2. 収穫した後の脱穀を行うために用いられた

3. 稲を根元から刈り取るために用いられた

4. 土を掘り返して苗を植えるために用いられた
- 問2 弥生時代に本格的に始まった稲作において、実った稲の穂先のみを摘み取って収穫するために使われた磨製石器を何というか。（2016年 奈良県公立入試 類似）

1. 石鏃

2. 石包丁

3. 石匙

4. 打製石斧
- 問3 紀元前後に位置する東アジアの歴史を記した年表において、1世紀半ばに日本の「倭」の中にあった「奴国」の王が、ある中国の王朝に使節を送り、その証として金印を授けられたという記述があります。この時、奴国の王が使節を送り、金印を授かった王朝の名称として正しいものを選択してください。（2025年 愛媛県公立入試 類似）

1. 秦

2. 漢（後漢）

3. 魏

4. 隋
- 問4 3世紀の日本の様子が記された中国の史書『三国志』の「魏志」倭人伝において、約30の国々をまとめ、中国の魏に使いを送ったとされる邪馬台国の女王は誰ですか。（2025年 長野県公立入試 類似）

1. 卑弥呼

2. 北条政子

3. 推古天皇

4. 持統天皇
- 問5 弥生時代に環濠集落が形成されるようになった直接的な背景として、最も適切な説明はどれですか。（2024年 沖縄県公立入試 類似）

1. 稲作が始まり、土地や水の利権、蓄えられた食料をめぐる集落同士の争いが激しくなったため。

2. 大陸から仏教が伝わり、寺院を中心とした新しい町づくりが推奨されたため。

3. 大規模な土木技術が導入され、洪水などの自然災害から住居を守ることが目的となったため。

4. 気候の寒冷化により、家畜を野生動物の襲来から守るための囲いが必要になったため。
- 問6 1世紀半ば、奴国の王が中国の王朝（漢）に使者を送り、金印を授けられたという出来事について、その当時の国際関係のあり方や目的を説明したものとして最も適切なものはどれですか。（2026年 山口県公立入試 類似）

1. 仏教を日本に広めるため、優れた経典や仏像を日本へ持ち帰る許可を皇帝に求める使節を派遣した

2. 朝鮮半島での軍事的な優位を確保するため、中国の王朝と軍事同盟を結び、援軍を派遣してもらう約束を取り付けた

3. 対等な立場での外交を求める国書を送り、大陸の進んだ律令制度を日本へ速やかに導入することを目的とした

4. 中国の皇帝に朝貢してその支配下に入ることで、自身の王としての地位を認めさせ、国内での権威を高めようとした
- 問7 日本列島で稲作が広まり、人々が竪穴住居に住んで定住生活を行っていた時代について説明した記述があります。その記述には、大陸から伝わった銅鐸や銅鏡などの青銅器が祭りの道具として用いられていたことや、当時の中国の歴史書において日本が「100余りの国」に分かれていたと記されていることが示されています。この時代の名称として正しいものを選びなさい。（2022年 鹿児島県公立入試 類似）

1. 縄文時代

2. 古墳時代

3. 奈良時代

4. 弥生時代
- 問8 弥生時代に始まった、青銅器と鉄器の使い分けに関する背景について、正しい説明はどれですか。（2026年 北海道公立入試 類似）

1. 鉄器が実用的な武器や工具に用いられる一方で、青銅器は主に集団をまとめるための祭礼や権威の象徴に特化していった

2. 青銅は鉄よりも耐久性に優れていたため、大規模な土木工事の道具としてのみ使われた

3. 石器から鉄器への移行を嫌った指導者たちが、妥協案として青銅器を儀式に導入した

4. 青銅器は弥生時代の中頃に全て回収され、その原料はすべて鉄器の製造に再利用された
- 問9 1世紀ごろ、日本列島にあった奴国の王が、大陸の王朝である後漢の皇帝から「金印」を授けられた目的やその背景として、最も適切な説明はどれですか。（2015年 佐賀県公立入試 類似）

1. 中国の皇帝から統治者としての承認を受けることで、国内における自らの権威を高めるため。

2. 中国で流行していた仏教を日本に導入し、鎮護国家の思想を広めるための許可を得るため。

3. 中国からの渡来人を役人として受け入れ、日本全土を統一するための戸籍制度を整えるため。

4. 中国と対等な軍事同盟を結ぶことで、朝鮮半島南部にある鉄資源を独占しようとしたため。
- 問10 3世紀の倭（日本）において、邪馬台国の女王である卑弥呼が中国の魏へ使節を送った際、皇帝から授かったとされる称号と、その証として贈られたものの組み合わせとして適切なものはどれですか。（2019年 広島県公立入試 類似）

1. 親魏倭王の称号と、金印や百枚の銅鏡

2. 大王の称号と、鉄製の武器や農具

3. 倭王の称号と、仏教の経典や寺院の設計図

4. 漢委奴国王の称号と、金印
- 問11 日本の歴史における、弥生時代の社会の様子を説明したものとして最も適切なものはどれですか。（2024年 山口県公立入試 類似）

1. 大陸から稲作の技術が伝わり、水田の近くで共同生活を送る「むら」と呼ばれる集落がつくられるようになった。

2. 衣類に用いる素材として麻に代わり綿（木綿）が全国的に普及し、庶民の生活水準が大きく向上した。

3. 日本列島がまだ大陸と陸続きであったため、人々はナウマンゾウなどの大型の動物を追って移動しながら生活していた。

4. 農業の生産力を高めるために、同じ耕地で一年に二種類の作物を栽培する二毛作の技術が全国的に広まった。
- 問12 弥生時代から古墳時代にかけて、収穫道具が「石包丁」から「鉄鎌」へと変化したことに伴い、収穫の方法はどのように変化したか。（2016年 奈良県公立入試 類似）

1. 実った穂先だけを摘み取る方法から、株の根元から刈り取る方法へと変化した

2. 地中の根を掘り起こす方法から、穂を叩いて実を落とす方法へと変化した

3. 手作業で一粒ずつ拾う方法から、土器を使って一度に回収する方法へと変化した

4. 石の表面で穀を削る方法から、金属の刃で穂を細かく刻む方法へと変化した
- 問13 福岡県の志賀島で発見された金印には、正方形の印面に「漢委奴国王」の五文字が刻まれており、つまみの部分は蛇を模した形状（蛇鈕）となっています。この金印を奴国の王が後漢の皇帝から授かった政治的な背景として、最も適切な説明はどれですか。（2023年 富山県公立入試 類似）

1. 卑弥呼が「親魏倭王」の称号を得るための事前交渉として、大陸との友好関係を築くため

2. モンゴル民族の侵攻に対抗するため、大陸の軍隊に日本列島までの援軍を要請したため

3. 中国の皇帝から地位を認められることで、自らの権威を高めて周辺の勢力を抑えようとしたため

4. 大陸から仏教を公式に導入するための許可を得て、国内の宗教的な統一を図ろうとしたため

答え合わせ・解説

問1	答え 1 稲の穂の部分を摘み取るために用いられた	弥生時代前期の収穫方法である「穂首刈り」に関する問いです。当時は稲が実る時期が一定ではなかったため、実った稲の穂だけをつつ石包丁で摘み取っていました。根元から刈り取る方式は、後に鉄製の鎌が普及するまで一般的ではありませんでした。
問2	答え 2 石包丁	稲作が普及した弥生時代を代表する農具の一つです。当時は稲の品種が統一されておらず、一粒一粒の熟し方が異なっていたため、実ったものから順に摘み取る「穂首刈り」が行われていました。その際に使用されたのが、この磨製石器です。
問3	答え 2 漢（後漢）	1世紀半ばにあたる57年に、倭の奴国の王が中国の王朝である「漢（後漢）」に使節を送り、光武帝から金印を授けられたことが、中国の歴史書である『後漢書』東夷伝に記されています。この金印は、江戸時代に現在の福岡県にある志賀島（しかのしま）で発見され、「漢委奴国王」という文字が刻まれていました。
問4	答え 1 卑弥呼	3世紀の日本（倭）では、多くの小国が争っていましたが、邪馬台国の女王である卑弥呼が呪術的な力を背景にこれらをまとめ上げました。彼女は239年に中国の魏へ使者を送り、外交関係を築いたことが『魏志倭人伝』に記録されています。
問5	答え 1 稲作が始まり、土地や水の利権、蓄えられた食料をめぐる集落同士の争いが激しくなったため。	縄文時代の狩猟・採集中心の生活から、弥生時代の稲作中心の生活へ移行すると、余剰生産物の蓄えや水田に適した土地をめぐる貧富の差や集落間の対立が生まれました。こうした紛争（戦争）の証拠として、防御用設備を備えた環濠集落や、矢を射込まれた人骨などが各地で発見されています。
問6	答え 4 中国の皇帝に朝貢してその支配下に入ること で、自身の王としての地位を認めさせ、国内での権威を高めようとした	当時の日本（倭）は多くの小国に分かれて争っており、各国の王は、強大な力を持つ中国の皇帝に貢物を捧げる「朝貢」を行いました。それに対して皇帝がその土地の支配権を認める（冊封）ことで、王は自国内や周辺の国々に対して自分の正統性や優位性を誇示しようとした。1世紀の奴国の王による外交も、こうした背景によるものです。
問7	答え 4 弥生時代	紀元前数世紀から紀元後3世紀頃にかけての日本列島では、大陸から伝わった水稻耕作（稲作）が普及し、食料生産が安定したことで社会の仕組みが大きく変化しました。この時代、鉄器が武器や工具として使われる一方で、銅鐸などの青銅器は豊作を祈るための祭礼具として重宝されました。また、中国の歴史書『漢書』地理志には、当時の日本（倭）が100余りの小国に分かれ、一部の国が楽浪郡を通じて中国（漢）に使者を送っていたことが記されています。
問8	答え 1 鉄器が実用的な武器や工具に用いられる一方で、青銅器は主に集団をまとめるための祭礼や権威の象徴に特化していった	弥生時代の日本において、金属器は「実用の鉄」と「祭祀の青銅」という二面的な使い分けがなされていました。稲作の普及に伴って集団が大きくなると、人々をまとめ上げるための儀式や、その集団の頂点に立つ指導者の権威が必要となりました。そのため、美しく加工しやすい青銅器は、実用性よりも、見る人を圧倒するような象徴的な価値を求められるようになったのが大きな背景です。
問9	答え 1 中国の皇帝から統治者としての承認を受けることで、国内における自らの権威を高めるため。	当時の日本列島には多くの小国が分立していました。奴国の王は、当時アジアの広範囲を支配していた後漢の皇帝に使者を送り、貢ぎ物を捧げる「朝貢」を行うことで、自らの支配権を国際的に認めさせようとした。これを「冊封」と呼び、中国皇帝という後ろ盾を得ることで、他の小国に対して政治的な優位に立つ狙いがありました。
問10	答え 1 親魏倭王の称号と、金印や百枚の銅鏡	卑弥呼は239年に中国の魏へ使節を派遣しました。当時の中国は魏・呉・蜀が並立する三国時代であり、卑弥呼は北方の魏と結ぶことで外交的な後ろ盾を得ようとした。魏の皇帝はこれに応え、「親魏倭王」の称号とともに、その権威を象徴する金印や、当時の日本列島では希少だった銅鏡などを授けました。
問11	答え 1 大陸から稲作の技術が伝わり、水田の近くで共同生活を送る「むら」と呼ばれる集落がつくられるようになった。	弥生時代には、大陸から伝来した稲作によって定住生活が本格化しました。水田の管理や収穫には集団での協力が必要だったため、人々は水田の近くに「むら」を形成するようになりました。日本列島が大陸と陸続きだったのは旧石器時代の特徴です。また、綿（木綿）の普及は江戸時代、二毛作が全国的に広まったのは鎌倉時代から室町時代にかけての出来事です。
問12	答え 1 実った穂先だけを摘み取る方法から、株の根元から刈り取る方法へと変化した	石包丁は「穂首刈り」に適した道具でしたが、鉄製の鎌が普及すると、稲を根元から切り取る「根刈り」が可能になりました。根刈りは収穫の効率を大幅に高めただけでなく、収穫後の藁（わら）を家畜の飼料や肥料、わら細工などの資材として活用することにもつながりました。
問13	答え 3 中国の皇帝から地位を認められることで、自らの権威を高めて周辺の勢力を抑えようとしたため	当時の倭（日本）は多くの小国に分かれていました。奴国のような有力な国の王は、中国の皇帝に使節を送って「臣下」となる代わりに、王としての正当性を認めてもらう（冊封を受ける）ことで、国内や周辺諸国に対する権威を強化しようとした。仏教の伝来や卑弥呼の登場、モンゴルの侵攻はすべて後の時代の出来事です。